【高熊山土・月宮宝座松釉】

教主さまお作　灰釉茶盌「月の宮」

題字出口直日

通巻第605号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

進み行く月日の駒に神ならひ
われは進展主義をとるなり

出口王仁三郎聖師

「ありがとう」を次代へつなぐ

愛善宣教課主事　柿崎哲男

先日、千葉主会の少年夏期学級に参加させていただきました。同夏期学級のテーマは「ありがとう」。あらためてこの感謝の言霊の深さを感じ、考えさせられました。

初日、青年部長が参加の子供たちに「〝ありがとう〟の反対は〝あたりまえ〟です。みなさんは普段、お父さんやお母さんに〝ありがとう〟を言えていますか」と話していました。私は内心「ドキッ」としました。普段の生活の中で、どのくらい感謝をもって過ごしているかと考えると、少し恥ずかしくもありました。

出向先で何度か「何かおかげ話を」と求められても「あまり体験がないんです」といって、私自身の体験談はお話しすることがありませんでした。しかし、自らの生活や体験を顧みて〝あたりまえ〟から〝ありがとう〟〝ありがたい〟という視点に切り替えるだけで、小さいことから大きい出来事まで、身の回りには感謝せずにはいられないことであふれていることに気づかされます。

「火のご恩水のおめぐみ土の恩これが天地の神のみすがた」（二代教主さま）

大神さまからお許しいただいている、火、水、土のご恩、また生きていく上で片時も欠くことのできない空気のご恩。〝あたりまえ〟のように生かされていることへの感謝、普段忘れがちな〝ありがたさ〟をあらためて思います。

また現在、東京本部でご用にお使えさせていただけていること、遠方に出向しても無事に帰苑させていただけていること、大病もなく健康に過ごさせていただけること……。考えてみますと、〝あたりまえ〟の日常の中に、大神さまの大きなご守護があり、形式的ではなく心から〝神さまはありがたい〟との感謝の気持ちをもって、生かさせていただかなければならないと反省させられます。

大本では、〝ご神徳〟と書いて〝おかげ〟と読むことがあります。よく「おかげはいただき得」といわれますが、大神さまのご守護に常に感謝申し上げ、自己の魂に徳を積ませていただくこと、これが〝おかげ〟であり、現界での向上への道でもあるのではないでしょうか。

後継者育成の根幹として、大神さまに対する「ありがとうございます」という、感謝の心の大切さ、ありがたさを、次の世代へ引き継いでいかねばならないと感じます。

葬祭と祖先供養

～みたままつりの大切さ～

家族葬、直葬、自然葬など、近年さまざまな葬儀の形が増えてきました。葬祭は単なる肉親との別れの儀式ではなく、たましいが安らかに「あの世」（霊界）へと旅立たれ、向上されますようにと祈る子孫の大切な務めです。大本の死生観に触れながら、祖先供養について学びます。

昨今の葬儀事情

主要国の葬儀費用は「葬式は、要らない」（島田裕巳著）に拠りますと、日本では平均２３０万円、イギリス12万円、韓国37万円、アメリカ44万円だそうです。日本消費者協会調べでは日本は１９０万円程に下がっているそうですが、いずれにしても日本は断トツで高額となっています。墓地は東京都の平均価格で２７８万円。死亡者数は昭和30年代当時、年間70万人だったのが、現代は１２０万人と増えています。そのため都市部では葬斎場や火葬場は混んで順番待ち。葬儀社は乱立といった状態です。

一方、高齢者の葬儀で喪主もすでに定年退職されている場合、参列される会葬者も少ないという理由から、簡素な葬儀、安価な葬儀を希望する傾向があり、１日葬や家族葬、直接火葬所で葬儀を済ませる直葬（関東で22％）も今日では行われています。

もっと極端なのが０（ゼロ）葬と言われるもので、直葬で葬儀を終えたあと、遺骨を持って帰らない。遺骨は火葬所で処分してもらうのだそうです。

このように葬儀事情は様変わりしています。しかし根本に立ち返り、私たちは何のために葬儀をしているのか。故人の魂はどうなっているのか。年祭や慰霊祭を行う「みたままつり」はどうあるべきなのか、考えてみたいと思います。

社会的役割

30年程前でしたが、ある会社の会長が亡くなられて葬儀を行ったことがあります。３千人を超す会葬者がありました。社葬でした。もちろん粛々と立派に葬儀は執り行われたわけですが、立場があるなしに関わらず、社会的意義として広くその人が亡くなったということを告知する働きが葬儀にはあります。また故人が生前世話になったことに対して、遺族が挨拶をする機会、逆に故人に世話になったため会葬に見える機会ということも大切な葬儀の意義ではないでしょうか。

まだ記憶に新しい昭和天皇のご崩御の折、大喪の礼という天皇の葬儀が執り行われました。昭和64年１月７日ご崩御になられ、２月24日大喪の礼となり、世界から１６４カ国、27機関の代表ら７００人をはじめ、国の各界代表者らによる参列、沿道には20万人の方々が見送りに駆けつけました。公職の立場にある人だけでなく、生前立派な肩書きがなくても、例えば家族だけで葬儀を済ませたあと、近所の知り合いの方が弔問に見える、ということはよくあることです。

心理的役割

生後８カ月という稚児の葬儀をさせていただいたことがあります。父親も母親もまだ20代前半の若い夫婦に第１子が生まれ、大切に育てられていたある時、風呂場での不慮の事故でした。あまりに悲しい葬儀でした。

霊界では男性は30歳、女性は20歳くらいの姿になると、教えられていて、幼児が亡くなられたら、中有界で教えを受けながら成長し、天国に復活すると示されています。また、現界に人が生まれてくるのは、現界での修行があるからと言われており、幼くして亡くなる子供の場合、それだけ現界での修行が少なかったことになるのですが、嬰児・幼児は例外とされています。素直な穢れのない赤子心のままであることと、大神さまのご慈悲によって、天人神子となれるのです。もちろん、その家族の悲しみを考えると、簡単に言えることではありませんが、霊界ではそのように救われていくのです。

葬儀と後の50日間のまつりを通して、命の尊さ、生と死を考えることは、まさに心理的役割だと思います。

教育的役割

印象に残る葬儀があります。それは曾孫の小学生や幼児ら10人ほどの子供たちが横一列にならんで弔辞を行ったときのことです。「おばあちゃん、幼稚園に連れていってくれてありがとう」「おばあちゃん、買い物に連れていってくれてありがとう」「おばあちゃん、あいさつの仕方を教えてくれてありがとう」「おばあちゃん、おいしいごちそうを作ってくれてありがとう」等々、その子供たちが悲しさを押しこらえながら、順番に思い出の出来事、感謝の言葉を述べていました。それは会場の皆がもらい泣きするような、でも愛らしく温かい葬儀でした。命の大切さ、家族の別れ、人の死ということを幼児期に教える、葬儀にはそういう意味もあると感じました。

宗教的役割

葬儀とは亡くなった故人の魂を慰め、この世からあの世へ送る儀式であり、死後の世界での幸せを祈る儀式であります。そしてその家の宗教を改めて確認す

～21世紀・生きがい講座～

椎野恭三（しいのきょうぞう）
大本東京宣教センター総務管理課長

る機会でもあります。その時、葬儀の先達である宗教者と喪家とのかかわりは、その後のみたままつりに大きく影響します。

地域で違う葬儀のあり方

葬儀の作法は、地域の文化や風習、環境によって違いがあります。

沖縄に行きますと現在は小さな個人墓が霊園などでも造られているのですが、親族が共有で使う亀甲墓、破風墓と呼ばれる大きな墓があります。これは元々、故人を火葬ではなく、風葬で弔い遺骨が朽ちて数年後に洗骨をして骨壷に納める2回葬が行われていたからだそうです。現代では火葬が多くなり洗骨はなくなっているそうですが、葬儀の時その大きな墓の前で食事をしたり酒を振る舞ったり故人の魂を慰めるとともに家族や親族を大事にする文化は受け継がれています。鹿児島では墓に生花を絶やさず飾るという風習があります。暑い夏でも月に2度も3度も花を取り換えて、墓の回りをきれいに掃除し整えています。先祖を大事にする気持ちを、花を飾ることで表しているのだと思います。

海外に目を向けると、モンゴルで体験した話ですが、モンゴルの田舎に行きますとまだ鳥葬が残っています。チベット仏教の影響です。またインドのガンジス川では沐浴している上流で葬儀が行われ遺骨が散骨されるということもあります。

通夜の意味

上皇陛下が生前退位を発表された平成28年当時、お気持ちをビデオメッセージで発表されました。そのお言葉のなかで殯（もがり）について触れておられました。殯とは古くは魏志倭人伝にも記されており「古代では死者をすぐ葬らず、死者を別小屋に安置し仕える風習があり、これを「もがり」と称した。死者を手厚く扱う意味と共に、死の境界線が明らかでなかったため骨化することを待つ意味もあった。火葬は骨化を早める葬法として薄葬（はくそう）として受容された面がある。通夜はこの名残の面がある」（葬送用語辞典）とあります。

葬儀のため集まった親族家族が、招魂式（一般に通夜）で一晩、遺体のそばで故人を偲び弔うことは、とても大切なことです。

みたままつりのはじまり

『大本宣伝歌』の「死生観」では「神の御子たる人の身は生まれて死んでまた生まれ死んで生まれてまた生まれ死んで生まれてまた生まれどこどこまでも栄えゆく堅盤ときはに栄えゆく」と、輪廻転生が説かれています。そして「霊界と現界はつながっている」と示されています。葬儀では、亡くなった魂に死んだことを宣言し、中有界でとまどう死者に、現界への心配をさせず、これからどうしたら良いかを伝え、魂の安定、向上を願う儀式であります。

葬儀は、みたままつりのはじまりであります。死後50日の新霊祭祀、50日合祀、その後の年祭、慰霊祭とつながっていきます。『霊界物語』58巻「礼祭」のところに「たとへその精霊が現界に再生して人間となり霊界にをらなくても、やはり祭典は立派に執行するのが祖先に対する子孫の勤めである」「祭祀を厚くされた人の霊は霊界現界の区別なく、その供物を歓喜して受けるものである」と。先祖の魂が現世に生まれ変わっていたとしても、子孫のみたままつりの恩恵を受けていると示されています。また「ゆゑに祖霊の祭祀は30年どころか、相成るべくは千年も万年の祖霊も、子孫たるものは厳粛に勤むべきものである」と。現界で生きる子孫が真心を込めて行う祭典や供物は「霊界にあるものをして歓喜せしめ、かつその子孫の幸福を守らしむるものである」と教えられています。

先祖のみたまの向上を願う

大本の出口直日三代教主さまは、「先祖をおまつりしているといっても、ただ先祖に祈っている人が多い。〝ご先祖さま、家庭が円満になりますように、孫が達者であるように、おじいちゃんやおばあちゃんを守ってください。なんとかうまくいきますように……〟と、先祖にすがるような祈りばかりして、先祖を救い上げることを真剣に念じて先祖のために祈っている人がどれだけあるかということです。みたままつりとは、先祖を救い光明に導くことであり、その向上を祈ることが一番大切であるのに、それぞれが熱と光をもらうことばかり祈って、こちらから熱と光を供給することを怠っているのではないでしょうか」とお示しくださっています。

大本の葬儀は故人の霊魂を中心にした祭典であり、葬儀の折もその後のみたままつりにおいても、大神さまのご神徳をいただき、先祖のみたまの向上を祈らせていただく大切な祭祀の道であると強く感じます。

掲載文は、平成31年3月20日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭

東光苑月次祭は、7月14日午前10時30分から、斎主・椎野恭三総務管理課長のもと執行され、277人が参拝した。祭員は神奈川主会が、少年祭員は草野友哉さん、月東昴瑠さん、伶人は二絃の会関東支部、『大本神諭拝読』を朝倉暢子群馬主会長が、添釜は中村社中が担当した。

祭典後、猪子恒東京宣教センター長があいさつ。本年7月1日付の人事発令で、関東教区における特派宣伝使制度が改まり、あらたに駐在宣伝使6人が配置されることになったことを述べた。駐在宣伝使は、東京宣教センター職員が兼務して行い、被任命者は次の通り。

【駐在宣伝使】

橋本伸作（東京宣教センター次長・兼愛善宣教課長）
椎野恭三（総務管理課長）
加藤道明（祭務課長）
柿崎哲男（愛善宣教課主事）
出口拓生（祭務課主事）
神宮幸太郎（祭務課主任）

続いて、来る7月16日～20日にかけて、台湾で開催される第3回人類愛善会国際ネットワーク（IRUHA）国際集会台湾訪問団に、東京主会の渡辺咲さん、茨城主会の松浦みいづさんの2人が参加することとなり、壮行会が行われた。はじめに小林龍雄人類愛善会理事が趣旨説明。ついで嶋貫光喜大本総代が壮行の言葉と関東教区各主会から寄せられた餞別を手渡した。続いて渡辺さん、松浦さんがそれぞれあいさつ。参拝者から大きな拍手が送られた。

この後、東京・神奈川・茨城・埼玉の各主会青年部から、夏期学級の案内があり、信徒子弟の送り出しを呼びかけた。

午後1時30分から2階講座室で、「元気のでるお話」（関東教区青松会主催）が開催され、青松会による紙人形劇「3匹のかわいいオオカミ」の上演に続いて、猪子センター長が「令和時代のご神業」と題して講話。『伊都能売神諭』を紹介しながら、神さまの〝ご経綸〟として進められてきた大本の歴史や、世界連邦運動をはじめとする五代教主さま時代のご神業の進展について話した＝**写真上**。

21世紀・生きがい講座

第196回21世紀・生きがい講座は6月19日、港区新橋の航空会館で開催され、小林龍雄人類愛善会理事が「一つの神、一つの世界、一つの言葉を目指して～人類愛善会の歴史と現代～」と題して講話した。受講者は30人。

小林講師は、聖師さまが「万教同根、人群万類愛善」の理念のもと、世界恒久平和を目指して人類愛善会を設立された経緯を説明。その3つの柱として宗教協力、世界連邦運動、エスペラント普及に取り組んでいる様子を紹介。また、食糧問題などにも触れ、「出口直日三代総裁は、これからは自己本位の思想を捨てて大きな視野で人類全体のことを考えていかなければならないと示されている。和合の精神と、万教同根、人類愛善の気持ちを一人ひとりが持ちながら、一歩一歩進んでいくことが大切」と述べた。

参加者からは、「人類愛善会のことを知ることができ大変参考になった。素晴らしい活動だと思った」「人類愛善思想と人類愛善会の活動を詳しくしることができ、自分自身の足元を見直すことの大切さを実感した。世界連邦構想には深く共鳴できた」などの感想がよせられた。

東光苑 大道場修行

下記の日程で東光苑大道場修行を開催します。どなたでも受講いただけます。皆さまのご参加をお待ちしております。

記

日　時　9月21日（土）午前8時半受付
～23日（月・祝）午後3時ごろ終了
会　場　大本東京本部
内　容　亀岡・天恩郷で受講する全講座
（高熊山参拝・神苑参観を除く）
※梅松苑での講座を受講すると全日程が終了します。
参加費　4,500円（食費・宿泊費などを含む）
※別途「修行のしおり」1,000円（お持ちでない方）
定　員　30人（定員に達し次第、締め切り）
申　込　食事、宿泊費の明細を記入の上、東京宣教センター愛善宣教課までお申し込みください。
※日程表、申込用紙がございます。愛善宣教課にお問い合わせください。
締　切　9月12日（木）

9月 東光苑祭典・行事予定

8日（日）午前10時30分～
東光苑月次祭（長寿感謝祭・交通安全祈願祭）・秋季合同慰霊祭

11日（水）午後7時～
全国一斉世界平和祈願祭

13日（月）午後6時～
秋をめでる夕べ

18日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題　王仁三郎の耀盌と利休の楽焼茶盌
～耀盌顕現70年の輝き～
講師　佐々木虚室（松楽窯主）

21日～23日（土～月・祝日）
東光苑大道場修行

23日（月・祝日）午前10時30分～
三代教主毎年祭（29年）